

秋田地区かわまちづくりの挑戦

東北支店 水圏グループ 片桐 一三、有田 茂、山口 俊哉

合意形成のプロセスにおいて、始まりの時期(始動期)は非常に重要な意味を持ちます。平成19年度に始まった秋田地区かわまちづくりワークショップで、どのような工夫が凝らされたのか紹介いたします。

秋田地区かわまちづくりとは

かわまちづくり——という言葉をご存知でしょうか。「かわ(川)」と「まち(町)」、生活と深く結び付いてきたこの2つの要素が、一緒に手を携えたらどんなことができるのだろう、そんな想いから「かわまちづくり」という言葉が生まれました。

秋田地区かわまちづくりは、秋田の「かわ」と「まち」の個性を大事にしなが、自ら楽しい地域を創造していこうという取り組みです。活動の主役は、地域の人達、4つの地域のワークショップです。



図1 秋田地区かわまちづくりワークショップの構成

(2)関係者アセスメントの実施

ワークショップの成否は、立ち上げと終わりで決まるとも言われるぐらい、立ち上げのプロセスは重要なポイントになります。

秋田かわまちでは、「関係者アセスメント」という取り組みを行いました。ワークショップで話し合いたいテーマやワークショップに参加して欲しい人、開催スケジュールなどを地域の人達から聞き取って、それを組み込んでかわまちづくりの始動期プロセスを作っていくという取り組みです。

この「関係者アセスメント」は、直接面談による聞き取り調査という形で行いました。まず一人の方から話を聞いて、次にその人から紹介された人に話を聞くという「芋づる式」の調査方法です。36名の方から話を聞き、「かわ」や「まち」に対する想いやユニークな構想を伺うとともに、秋田かわまちのキーパーソンとなるであろう約70名の方々の情報をいただきました。



図2 芋づる式聞き取り調査のイメージ

秋田かわまちの挑戦

(1)無から始めるワークショップ

秋田かわまちには、通常のワークショップと大きく異なる点があります。それは、秋田かわまちには、まだ具体的な計画がない、ということです。

何をするのか、それもワークショップの中でみんなで話し合っ決めていこう。楽しみながら、秋田の「かわ」と「まち」、そして地域を良くしていこう。どこにたどり着くのか判らないけど、素晴らしい活動になっていけるかもしれない。具体的な計画にしばられるのではなく、自由に「かわ」と「まち」について語り合うことのできる場、それが秋田地区かわまちづくりです。

この方法の利点は、一人の方が話すことのできる時間をたっぷり取れるということです。会議等で一人の方が発言できる時間は5分から10分程度ですが、今回の聞き取り調査では一人あたり約80分の時間をかけています。面と向かって話をする効果は信頼関係の構築という面にあらわれてきます。それと同時に、秋田かわまちの存在と目的を伝えるPR効果もありました。

秋田かわまちのワークショップ立ち上げ時の参加登録者数は約140名でした。聞き取り調査で紹介された約70名の方のうち、50名の方がワークショップに名を連ねてくださいました。そして聞き取り調査を行った方から、関係する組織や団体へ口コミで情報が広がり、応募案内以外のルートで秋田かわまちの存在を知って、応募していただいた参加者は100名を超えています。

秋田かわまちの宣伝の役割を、「関係者アセスメント」が担った結果です。

(3)「担い手づくり」に繋がる連携の取り組み

秋田かわまちでは、ワークショップの大きな目標の一つに、「担い手づくり」というものを掲げています。

これは秋田の未来を考えていく人達を自分達で育てていこうという趣旨ですが、同時にワークショップのような活動を運営できる人材を地元で育てていこうという意味も込められています。

その活動の一つが、「民・産・学・官」4者の連携です。秋田かわまちでは、市民やNPO活動者、産業関係者、学識経験者、行政関係者が、それぞれ個人の立場でワークショップに参加しています。それと同時に、ワークショップのグループ進行役と記録係も、「民・産・学・官」それぞれから人材を募り、協力体制の中でワークショップを運営しています。



図3 連携からはじまる担い手づくり

秋田地区かわまちのこれから「実践、そして継続」

ワークショップの立ち上げから半年、秋田かわまちは何らかの成果が望まれる時期に差し掛かってきました。ワークショップは話し合いだけで、結局、実践に結びつかない。そんな声が聞かれることがあります。早期に達成感をもたらす成果の実現と、さらなる大きな目標への躍進。そのために、「私たち「いであ」も地域の人達と一緒に秋田かわまちを創っていきたいと考えます。

楽しくそして熱く!!
各地区のワークショップでは、それぞれの地区別に特徴のある議論が展開されました。

新屋左岸・表町ワークショップ
新屋左岸・表町ワークショップは、既に昨年より地域の町並みや景観について活動している「新屋表町通り活性化推進委員会」のメンバーが、ワークショップの中心を担っています。この日は若手県議会議員に清水の現地視察日程と重なってしまい、また2日後の28日に秋田市新屋支所においてワークショップ開催が決定したことからメンバーが集まることは出来ませんでした。27日は右班進行役から新規参加者に対して、新屋表町におけるこれまでの活動について説明が行われました。

これまでの活動や苦労談を新規参加のメンバーに説明する右班進行役。話に熱が入り、ほぼ10分休む間もなく、いろいろなお話を披露してくれました。

地元テレビに地域の活動が紹介された際は、急きょ参加者の要望に応じて、テレビの録画映像が登場

新屋右岸・三角沼ワークショップ
新屋右岸・三角沼ワークショップでは、「現在の課題」、「近未来像」、それに「将来像」とテーマを絞って、どんな対策を考えればいいのか意見を述べてもらいました。

現場の課題
● 遊歩道の整備
● ハード整備は地域の方達の支援がなければ実現は難しい。
● 利用者のマナー向上が大事。
● ボランティアのネットワークワーク。管理・運営は住民が担う。

誰もが自然を楽しんで憩えるように
フットパス、水質浄化、環境整備、自然の保護、斜面を利用した野外コンソートやカヌーなどのイベント

雄物川ワークショップ
雄物川は対象とするエリアが広く、第1回目のワークショップでは参加者の皆さんから面白いアイデアを出してもらいました。今後、具体化できるものや勉強していくものなど焦点を絞りながらワークショップを進めていきます。

雄物川の奥見どころ、奥見どころ
では、雄物川でどんな面白いことが考えられるだろう
水上での星空の観察会、花火、水上自転車、産産の空間、リバーサイドカフェ、葉の花燈、キャンプ場、市民農園…etc
水がきれい、景色が良い、安全……
使いづらい、ゴミが多くて水質が悪い、近くに行くときぞく汚い……

旭川・川反ワークショップ
旭川・川反ワークショップでは2つのグループに分かれ、「川反でどう活動したいか」、「旭川の思い出」と「望む姿」について、想いを語り合いました。
2つのグループに共通していたのは、「旭川の水辺を歩けるようにしたい」という想いです。

旭川全体を見据えて考えていこう
旭川上流の水質改善は毎年の課題
用紙からも飛び出す熱い想い
誰でも安心して歩ける、そして歩きたくなる川反

図4 2007年11月に4地区合同で開催された第1回ワークショップの様子(秋田かわまちニュース第2号より)